

第4回 「愛猿記賞」（エツセイ部門）【佳作】

「紺帽子いっせいに」 東京都 小野 みふ

毎朝八時ごろ、近くのアパート前にとまる幼稚園バス。家からたつた百メートルほどの距離でも、入園したての娘にとつては、ぬかるんだ泥道のようだつたに違いない。

ポケットにハンカチを入れたあと、重たいリュックを背負い、片方ずつ靴をはいて――。

「よし、いこう」

「……うん」

やつと外に出たところで、なかなか進まない。繋ぐ手に、ぎゅっと力が入る。みんながバスに乗つたあと、ぽつんと突つ立つたまま。

「いつしょに歌つて楽しもうね」

先生に励まされて、娘がしぶしぶ乗り込む。

涙ぐんだ顔を見送るたび、胸が痛んでたまらない。後ろ髪を引かれながら踵を返して、溜息交じりに玄関を開ける。脱ぎつ放しのパジャマを拾いあげて、ついぱーつとしてしまう。

(ちゃんとスモックに着替えたかな？ 元気よく遊んでいるといいな)

いくどかじ
幾度家事の手を止め、どれほど心配したことか。バス停に迎えにいつても、相変わらず、

もたもたして動かない。そこで早く慣れるために、身支度の練習に励んだ。もつとゆとりを持てるよう、共に早寝早起きを心がけた。

「ママ、あのね、今日ね……」

娘が歩きながら、ぽつぽつ語り始めたのは、夏休みが明けてしばらくしたころ。なかよし

の友達ができるにつれて笑顔が増えて、バス停までの行き来もスムーズになつていった。

みんなから遅れてうつむき加減に降りていたのが嘘のよう、紺色の帽子がぽんぽんと飛び跳ねる。さよならの挨拶をしたあと、いつせいにママやパパの元に駆け寄る。

「みてみて、おり紙やつたんだ」

娘が得意げに手提げ袋を開いてみせる。ぱっと覗けば、色とりどりの動物がいっぱいだ。

「とつてもにぎやかだね。どれも上手よ」

「ママにはいっ、ぞうさんあげる！」

「まあ、ありがとう」

「ねえ、しってる？　ぞうさんのながーいお鼻はね……」

ゆかいなおしゃべりが、弾む、弾む。誇らしげな笑顔が、キラキラ眩しい。朗らかな声を響かせながら、あつという間に家に到着だ。

穏やかな小春びよりの朝。

「ママ、はやくうー。バス来ちゃうよー」

娘がさつと靴をはいて、大きく手招きする。

あわててブーツに足をつつこんで、もすもす後を追いかける。

「あつ、來た」

娘が少し丈の短くなつたスカートを揺らしながら、一番乗りだ。すつかり慣れて、お姉さんらしくなってきた。

「バイバーイ」

元気いっぱいの子どもたちをのせて、赤いバスがゆっくり発車していく。角を曲がって見

えなくなつたところで、そつと手を下ろす。もう何も心配することはない。

さあ、新しい一日の始まりだ。^{はじ}